戦後の昭和歌謡について《2》

山形　俊男
（昭和39年機械科卒）

※前号(昨年号)に(4)が抜けていたので下記に追加 ――

● 往時の世相・社会性を反映した歌(4)-(7)

(4)　《長崎の鐘》　歌【藤山一郎】　昭和24年

藤山一郎

戦前、数多くのヒットソングを書き続けたサトウハチローは、戦後大人の歌の世界から童謡に河岸(かし)を変える事になるが、これはその大人の歌の最後となる記念すべき歌である。

長崎で原爆に被爆した長崎医大教授永井隆の「長崎の鐘」が原本になった。永井は原爆投下された時、病院の2階にいて猛烈な爆風で宙に吹き飛ばされた。爆心地から600㍍の病院はむろん、街全体が一瞬にして消え、妻の緑は自宅で被爆死。焼け跡には妻のひとかけらの骨と、ロザリオの鎖が残されていた。幼い長男の誠一と茅乃の２児は、郊外の祖母の家に疎開していて助かった。妻を失い、被爆のために白血病が更に進んだ永井は、焼け跡に建てた僅か二畳の如己堂(にょこどう)で、2人の子供と共に病床生活を送る事になった。敬虔(けいけん)なキリスト教信者の永井は、長崎の惨禍(さんか)、被爆に苦しむ自らを神の摂理と受け止め、病床でひたすら原爆体験を書き綴った。「長崎の鐘」「亡びぬものを」「ロザリオの鎖」「この子を残して」と驚異的な筆力で矢つぎ早に書き下ろしていった。その中で、残される二児のために祈りを込めて書き下ろした「この子を残して」が、戦争で肉親を失った人々の共感を呼び、30万部のベストセラーになった。

そして「長崎の鐘」のタイトルで、永井隆の生涯が映画化される事になり主題歌の作詞をサトウハチローに依頼された。作曲は“日本の行進曲王”と謳われ、戦前戦後に幾多の名曲を残している古関裕而に託された。気心の知れたハチローから届けられた「長崎の鐘」の詞を入念に読んだ古関は、「長崎だけではなく、戦災の受難者全体に通じる歌を！」の思いを込めて、グレゴリアン・チャントの旋律を入れ「なぐさめ　はげまし　長崎の　」の部分から長調に転じる力強い曲を書いた。歌い手は当初、ある女性歌手を予定していたが、これだけ深い意味の歌を表現する自信はないと固辞され、藤山一郎に回された。藤山は歌詞の楽譜を眼で追い、その格調の高さに「素晴らしい！」の感慨を持った。

ところが、録音当日、風邪で高熱が出て断るつもりでスタジオ入りしたが、楽団全員が待機していた。この様子を見て藤山はダメモトを覚悟して吹き込みに臨んだ。ところが結果は、高熱で息も絶え絶えの唱法に、悲壮感が漂い一発でOKになってしまった。

病床にあって、ラジオで「長崎の鐘」を聞いた永井隆の感激はいかばかりだったか！

彼は2年後の昭和26年5月、天に召されている。

※前号からの続き

(7)　《ここに幸あり》　歌【大津美子】　昭和31年

「ここに幸あり」は、結婚式でよく歌われる定番曲である。伸び伸びと明るく歌えるホームソング調で歌う人も聞く人も、幸せな気分に浸れる歌である。この歌は日本の歌を代表する正統派の名曲で、歌詞の面白さ、日本語の美しさもさることながら、曲のスケールの大きさが世界的感覚なのだ。例えばメロディラインや歌詞の一部に、悲しみが宿っている。そうした悲しみを感じさせながらも、前向きなひたむきさを感じさせる。大津美子の正統派的な歌唱力が多くの人々の心を打った。

映画が絶頂期にあった昭和31年5月、松竹映画「ここに幸あり」の主題歌としてキングレコードに制作依頼があった。キングレコードは作詞の重鎮的存在の高橋掬太郎にタイトルに相応（ふさわ）しい詞を依頼、作曲は「泣くな子鳩よ」「かりそめの恋」でヒットを連発していた飯田三郎に一任する事にした。歌手は17歳の若さで「東京アンナ」でデビューした大津美子。その彼女が二番目の曲「ここに幸あり」で大輪の花を咲かせたのだ。

書き上がった詞は期待通り格調高い内容だったが、飯田の曲は大津の歌唱力に合わせた大胆な歌曲風のメロディーだった。キング内ではこの曲を聞いて「もっと柔らかくしないと受けないのでは　」と反対意見が強かったが、飯田はタイアップの強みと映画の主題歌から「お蔵入り」の心配はなく、気にも留めなかった。

曲想で妥協しない一方で、飯田は若い大津美子を展覧会に連れて行ったり、クラシックの音楽の深さ、広さなど一般教養について特訓を行っていた。小さく“こじんまり”と纏まってしまう歌にしたくなかったからだ。大津美子は、このベテラン作曲家の真意も分からず吹き込み前夜、思案に暮れて作詞家高橋掬太郎に電話を入れた。電話を受けた高橋は、孫娘を諭すように「日本の女性は、今も昔も苦労ばかりして来ている。私はそんな女性たちに、明るい明日が有る様にと、祈りを込めて作詞したんだ。君は若さと望みを込めて歌ってくれればいい　」と励ましてくれた。この言葉に吹っ切れた思いになって、大津は堂々と吹き込みに臨んだ。デビュー前の彼女は15歳で「上海帰りのリル」「お富さん」の作曲家である渡久地政信氏に師事して、毎週土曜の早朝愛知県豊橋市から上京して昼にレッスンを受けて帰る努力家であった。デビューして間もなく渡久地氏がビクターに移籍。落胆していた時に、飯田三郎さんに紹介されて、この大ヒットにつながる幸運を得たのだった。

YK リフォームのワイケー
塗装＆リフォーム
代表　大澤　隆夫　昭和42年機械科卒
〒198-0036 東京都青梅市河辺町1-813-7
東京都青梅市河辺町4-11-12
TEL. 0428-21-5102
FAX. 0428-27-1409
携帯. 090-6473-1846